

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	みらい不登校支援研究会
コース	団体研究コース
活動・研究のテーマ	「みらい自分づくりノート」を活用した個別最適な学び
<p>〈活動・研究の意義および活動報告〉</p> <p>1. 活動研究の意義</p> <p>私たち「みらい不登校支援研究会」では、所属校に在籍している子どもで、教育支援センターみらいに通所している子どもの支援を、学校だけでなく教育支援センターみらいに出向いて、教育支援センターのスタッフと共に行っている。教育支援センターみらいは、1975年から不登校の子どもへの通所・訪問指導を開始し今年で49年となる。ここでは、日々の活動以外に、キャンプなどの体験活動や、子どもが活躍できる文化的行事（研究所まつり）、心理面に配慮した学習支援や学校との密な連携など、幅広い支援に取り組んでいる。</p> <p>私たち「みらい不登校支援研究会」のメンバーは、多様な支援活動に取り組みながら、その底流にある子どもの自我形成（自分づくり）面に着目し、支援の土台を「支えるものとして長らく「子どもの自分づくりを支える支援のあり方」という研究テーマ掲げ実践を行ってきた。今年度は新たに、不登校児童生徒の可能性を引き出し、一人一人のニーズに応じた多様な学びを実現するための「みらい自分づくりノート」を作成し、興味のある分野についてとことん追求できる学習ツールとして活用したいと考え研究に取り組んできた。同時に、子どもたちの可能性を広げるために教育支援センターのスタッフだけではなく、美術や書道、AIによる画像生成などの専門家を講師（ゲストティーチャー）として招聘し、新たな出会いのチャンスを意図的に企画することで、子どもたちの興味や関心を広げることを試みた。その中で自分の好きなものを知り、好きを追究することで、自我形成が進んで行くと考えている。</p> <p>1. 活動報告</p> <p>(1) みらい自分づくりノート</p> <p>みらい自分づくりノートについては教育支援センターみらいとして初めての取組であり、子どもたちが自分の好きなものをみつける、自分の好きなものを知る、自分の好きなものを追求することを目的に3冊のノートを作成した。当初は子どもたちの自己開示への抵抗に配慮し、自己完結（他人に見せないもの）型のノートとしていたが、実際にノートを使う子どもたちの様子やアンケートの結果から、使ってみた子どもたちは、想定していた以上にスタッフや子ども同士での交流を望んでいることが分かった。それを踏まえて、塗り絵や写し絵のページを作ることで、子どもとスタッフ、または子ども同士がつながれるようなツールになるのではないかと考え、カラー見本のページを見ながら塗り絵ができるページや、イラストを写せるようにトレーシングペーパーを入れた4冊目を作成した。</p>	

(2) ゲストティーチャー

子どもたちが主体的に学べる授業であり、興味をもって追求することができた。AI を活用して絵画へ反映させる学習は小学部・中学部で行われ、自分のイメージした言葉が、絵となって現れた時は、目を輝かせた。点描は、元美術教員を招き技術を教わり、個性豊かな作品を仕上げることもできた。毛筆の授業では、思い思いの言葉や絵を毛筆で書き作品とした、KAPURA は、小学部・中学部が広いアリーナでたくさんの薄い木の板を使って、できるだけ高く積み上げたり、現在ある建築物を想像して組み立てたりするプログラムである。日ごろは、集団に入ることが苦手な子どもも夢中になって遊んだ。最後は、小学部と中学部でナイアガラの滝を想像し積み上げた。どの時間も子どもの感性を擽るもので、日ごろ体験が乏しい子どもにとっても充実した時間となった。

(3) みらいタイム「未来社会へ」

みらいタイムでは“自分を知る”“社会を知る”“自分について考える”“社会について考える”“自分の好きなものを通じて社会とつながる”をテーマとして、子どもたちが活動を通じて自分と社会のことを考える時間となるようなプログラムを設定した。2月には、第3回プレゼン大会を開催した。7名のエントリーがあったが、エントリーした子どもの中には、昨年このプレゼン大会を見てぜひ自分もやりたいという思いから時間をかけてPPTを作成し、意気揚々と発表した子どももいた。みらいタイムを通して、情報教育アドバイザーからPPTを作成するポイントと「伝わる技術」を学び、ステージに上がって大勢の人の前で発表した経験は今後につながる大きな自信となった。

(4) 季刊誌みらい

令和5年度の季刊誌みらいの概要

① 発行月と冊数

年間3回（夏号 秋冬号 春号）

冊数：夏号 100 冊 秋冬号 110 冊 春号 100 冊）

② 印刷：表紙は白黒印刷，原稿はカラー印刷を行い，製本はプリントセンターへ依頼

③ インク代：「ちゅうでん教育振興助成金」を活用

④ 編集部構成：編集部員4名（3年生），スタッフ4名子ども

昨年度までスタッフが声をかけないと投稿しなかった子どもが多かったが、今年度は自ら原稿を持って来る子どもが増えた。イラストや小説を投稿した子どもが、作品についてスタッフや周りの子どもたちから感想をもらうことでコミュニケーションの輪が広がり、その子どもの居場所づくりにつながった。また、意欲的に楽しみながら取り組む様子から、自己肯定感が高まったと考えられ、作品発表後もより意欲的に楽しみながら表現活動に取り組むことができている。作品発表で自己表現の場を得たことが自信となり、友人関係においても自分の気持ちを解放する原動力の一つとなったのではないだろうか。それぞれ自分の表出したい世界をこの季刊誌で表現する子どもたちが出てきた。

3. 本年度の活動を通しての成果

ちゅうでん教育振興助成を受けることができ、通常ならばできないような多彩なゲストティーチャーを招いて貴重な体験を行うことができた。その体験の中での達成感はもちろんのこと講師から作品の価値づけをしてもらうことで、自分の存在を確かなものを感じることができた。また「みらいノート」や「季刊誌みらい」をカラーで印刷することで、より子どもたちの創造力や意欲を掻き立てることができた。支援の本質は、子どもに何かを学ばせることではなく子ども自身が主体となって社会を自分のものとしてつかみ直し、子どもの主体形成につながった1年間であった。

